

砂場遊びに関する研究動向と今後の展望

箕輪潤子*

Review of Research on Children's Sand Play

Junko MINOWA

要 旨

砂場は保育環境の一つであり、砂場での遊びは乳幼児の様々な側面の育ちを促すことが一般的に認知されているが、保育や幼児教育において砂場での遊びが研究の対象となることは少なく、砂場が保育環境としてどのような役割を果たしているのかについては、まだ十分に明らかになっていない。本稿では日本におけるこれまでの砂場での遊びを対象とした研究について、①保育環境としての砂場がどのように捉えられているのか ②砂場における砂遊びの実態 ③砂場における保育者の援助 の3つの観点から整理し、今後の課題を探った。

キーワード：砂場遊び、幼児、保育

1. はじめに

多くの幼稚園や保育所では、日々子どもが砂場で遊ぶ姿を見ることができる。砂遊びは子どもに人気の遊びであるだけでなく、想像力や社会性などの発達を育む遊びとしても一般的に認識されている(小川, 2000)。さらに、幼稚園設置基準(文部省)においても平成七年の改訂までは幼稚園に砂場の設置が義務づけられており、現存する幼稚園の多くに砂場が設置されていることからわかるように、砂場は保育環境の一部としての役割を果たしてきたといえる。

しかし、砂場で子どもが遊ぶことや、砂場で遊ぶことによって子どもの発達が促されることが当然のこのように考えられていることもあり、砂場での遊びが研究の対象とされることは

*准教授 保育学・幼児教育学

多くない。しかし、子どもがよく遊ぶ場であるからこそ、砂場での遊びを改めて捉え直すことが必要であると考えられる。

朴(2008)は、砂遊び全般に関する日本の研究動向を先行研究の内容によって分類した上で整理を行っているが、本稿では砂場が保育環境の一つであるという視点に立ち、砂場を対象とした研究について、①保育環境としての砂場がどのように捉えられているのか②砂場における砂遊びの実態③砂場における保育者の援助の3つの観点から整理し、今後の課題を探る。

2. 保育環境としての砂場

笠間(2001)は砂場に対して込められた思いや砂場を普及させる努力などについて述べながら、遊び環境としての砂場を歴史的に探っている。笠間によると、砂場の起源はドイツにあるという。比較的砂地の多いドイツでは子どもが日常的に砂遊びをしており、その姿をみた大人が子どものための遊び場として砂場を作ったことが、砂場の始まりである。そして、1880年代にドイツからアメリカへと一人の女性によって砂場が持ち込まれる。当時、マサチューセッツにおける急速な工業化のなか殆どの労働者は貧しく、そのしわ寄せが子どもに来ていたことから、社会改良の一環として砂場の設置が試みられる。その後瞬時にアメリカ国内に拡がり、1900年代のプレイグラウンド運動へと繋がっていった。そのアメリカから雑誌を通して日本に砂場が持ち込まれる。明治三十一年に文部省の関連文書にも砂場が登場し、その後実践家の報告を機に設置が試みられるようになったことで、研究大会でその教育的な意味が発表された後に急速に普及した。笠間はその急速な普及について、その頃の幼児教育の主流であったフレベルの恩物を使った形式的な保育に対するアンチテーゼとしての、新しい保育の形だったのではないかと述べている。子どもの自発的な活動や経験の重要性が強調され、幼児の興味を大切にする保育が模索される中で砂場は普及していったのである(笠間, 1993, 1998)。

このように笠間による砂場の歴史的な起源の検討からは、砂場は子どもが自発的に遊ぶ姿から遊び場として生まれ、保育において自発的な活動を大切にしようとする試みから普及し、現在に至っていることがわかる。幼稚園教育要領(2008)には「自発的な活動としての遊び」という文言が掲げられているが、砂場が〈子どもの自発性〉を大切にしようとする試みから普及していったことから、砂場が保育環境として重要な役割を果たしていることが示唆される。

そして、笠間(1999)は、自然の中の遊びが減少している今日において、砂での遊びが子どもの創造力や想像力を育むことを指摘している。さらに石井(1993)も「可変性に富む砂という素材との取り組みが、取り組む空間にも可変性を生じさせている」と述べ、砂が遊びを変化

させる可能性をもった環境であることを示唆している。しかし、いずれの研究も砂場が子どもの発達に影響を与える可能性の示唆や、砂という素材の影響の示唆にとどまっていることから、より具体的な考察が求められる。

保育環境としての砂場を対象とした研究には、塩見ら（2002）の幼稚園・保育園における遊び、遊具の配置、動線に関する研究がある。塩見らは、砂場はいずれの年齢においても人気があることを示している。そして、半分近くの園で園庭から離れていること、ほとんどの園で一個設置であるために狭いことなど環境を変えることが難しい問題と、砂が固いなどの管理上の工夫で解決できる問題があることや、保育者が砂場の周囲に雑草などの自然物を用意するなどの配慮を行っていることについて述べている。また、横山（2003, 2004, 2005a, 2005b）は、園庭における幼児の遊びの誘発要因を複数の園を比較・検討し、砂場では子どもが一定時間留まって遊び続けると述べている。

なお、塩見らの研究や横山（2003）の研究は砂場を園庭の環境の一部として捉えており、保育環境として砂場を意識的に捉えた研究は未だにない。砂場は園庭のなかにありながらも、そこで留まる遊びが多いことから（2003, 2004, 2005a, 2005b）、動的な遊びを行うことや移動が多い園庭の一部でありながら独立した環境として捉えていくことも必要であると考えられる。

3. 砂場における幼児の遊び

砂場に関する研究の多くは、幼児が砂に関わる様子を観察した研究に集中している。本節では、①物的環境としての砂とのかかわり と ②砂場での幼児同士のやりとり に分けて先行研究の整理を行う。

(1) 砂とのかかわり

まず、砂場における遊びにおいて子どもがどのように砂と関わっているのかについて検討した研究について挙げる。

細田（1998）はボール遊びと共に砂場での遊びを観察し、生態学的視点から遊び行為と周囲・他者との関係性や持続の重要性についての考察を行っている。特に、砂場での遊びを述べた部分では、行為の流れが環境に起こす変化に次の行為の可能性の幅を見ながらどこまでも連鎖することによって作られているという言及をしている。子どもが砂に対してある行為を行うことによって砂が変化する。そして、砂が変化した状態から子どもは次の活動を起こす上で必要な（または、活動を起こさざるをえないような）イメージを引き出していると考えることが

できる。細田の知見は、子どもの遊び行為の流れへの注目によって初めて遊びの全体を捉えられることを示唆している。

砂場における子どもと砂とのかかわりを現象学的視点で捉えることを試みた粕谷(2007)は、砂の主な特性としての可塑性を挙げ、砂の可塑性が砂にかかわる遊びの遊隙を広げ、砂と遊び手の動きの同調・運動様態である往還の遊動を特徴づけていると述べている。またその往還は、子どものなかに期待と緊張とを生むと共に、砂の変化、例えば砂の壁が崩れることによって緊張から解放されることで、新たな砂との関係が生まれると述べている。

細田と粕谷が述べていることは、砂場での遊びにおいて砂という素材が果たす役割を示唆している。子どもが可塑性をもつ砂に対して行為を行うことで砂が変化し、その変化のなかに子どもが次の砂との関わりを見いだすこと、つまり砂という変化に富む素材が、子どもの遊びに動きをもたらしている(子どもの行為を生む)ということである。そのことと同時に、砂場での遊びを観察、分析する際には、子どもが砂とどのように関わっているのかを、遊びの流れのなかで捉えていくことの重要性をこれらの研究は示唆していると言える。

小川(2000)は、砂と子どもとのかかわり(行為)をより具体的に分類し、〈さわる〉〈こねる〉といったこの活動だけで終始する「始源の出会い」としての行為と、〈集める〉〈掘る〉〈積み上げる〉〈拡散する〉といった子どもたちが意図的に砂と関わる「意図的の出会い」としての行為があると述べている。そして、砂場での遊びにおいては、繰り返しが多いこと、子ども同士の会話があまり必要ではないことを見いだしている。

この小川の知見は、細田と粕谷が述べている連続的な行為が、繰り返しの行為から成立していることを示している。そして、砂に関わる行為のなかに、子どもが意図的に砂と関わる行為と特に意図がない行為が存在していることからは、細田や粕谷が述べているような次の展開を見いだしやすい行為の連続のみで砂との関わりが成立しているわけではないことが示唆される。

なお、砂場での遊びは、砂と子どもとの直接的なかわり、素手で砂とかわるだけでなく、砂と子どもとの間に道具が介在する場合もある。

幼稚園での砂場遊びを観察した石井(2004)は、砂遊びをする子どもがさわる、なでるなど砂の感触を感じている段階から次第に道具を使用し始めると述べている。そして島田(2002)は、幼児が砂遊びにおいて道具をどのように使用するかを検討し、1歳児はカップやふるいに砂を入れるだけであるが、2歳児になるとカップを型として使用したり、砂をふるうなど〈非本来的使用〉が多くなるなど行為の種類が増えると述べている。さらに、年齢が低い程、時間に対する道具数が多いことについても明らかにしている。そして、複数の道具の組み合わせに

においては、2歳児においてスコップと様々な道具を関連づける行為が見られ、年齢が上がるごとにスコップと組み合わせやすい道具を選択していくことを明らかにしている。さらに、笠間(2007)は、幼児が砂をすくったり入れたりという行為から、砂が入ったカップを地面にひっくり返す行為へと、何らかの形を意識的につくるという「表現」に変わっていく姿が見られたと述べている。

石井、島田、笠間が述べていることから、砂との関わりにおいてはふれる、さわる、なでるといった砂の感触を感じる段階から、子どもが砂の形を捉えるようになり、さらに砂で自ら何かを形成しようとするという、砂との関わり方に段階があることを示唆している。そして、その段階に応じて、砂場における環境として用意された道具の使用が始まり、道具も砂との関わりの中で多様な使用方法が試さされながら、より子どもの目的に沿った使用方法へと変化していくことが示唆される。但し、そこには年齢が上がる、もしくは砂での遊びの経験を重ねることによって、どのように子どもと砂との関係が変わっていくのかといった、発達の視点での研究が十分に行われているとは言えない、保育の環境として砂場を捉えるならば、子どもと砂場を捉える視点の中に、発達の視点が必要であると考えられる。

(2) 仲間とのかかわり

無藤(1996)は幼稚園の砂場における幼児同士の遊びについて、身体的行為の流れという観点からテーマや役割の決定過程についての検討を行い、対象に対する反復する動作によって遊びの流れが生まれ、幼児同士の遊びが成立していると述べている。具体的には、動きの細部によってテーマが強調されていることや、子どもたちがテーマから逸脱しないように動いたり言葉を発したりしていること、その一方で、動きの詳細までは了解されなくてもよいことなどについて述べている。さらに、主な動きが展開されている場から子どもたちが離れたがらないことについても述べている。

福西(2005)は、子どもにとっての砂遊びの意味を、砂場での幼児同士のやりとりから検討している。福西は、遊びが進むに従って幼児の行動が相手と同じような所作や態度をとる「同型的同調」から、相手の所作に応答した所作や態度・表情をとる「役割的同調」へと変化していくと述べ、イメージの同調・共有が共同活動の展開の契機となっていると述べている。さらに、砂に関わる擬態的な言葉を伴いながら砂を共有していくことによっても、砂という物質のイメージを共有し、同調した行動をとる契機となっていると述べている。

半田(1998)は、3歳児の場合一人遊びが多く、4歳児や5歳児になると、幼児同士で協力しあう様子が見られると述べている。仲間への働きかけと遊び場面を検討した松井(2001)は、

砂遊びについても検討を行っている。3歳児は呼びかけや自分の活動の提示、相手が必要な砂や水を与えるなど暗黙的な働きかけが多く、4歳児は相手の活動に関連した働きかけが多いと述べている。

砂場における仲間とのかかわりについては、テーマなどのイメージの共有については述べられているが、イメージを共有していく上で、砂とのかかわりや砂場という場がどのような役割を果たしているのかなどについては、未だに研究されているとは言えない。今後の研究の課題として、砂場で子ども同志の関わりにおいて、砂や砂場の性質がどのように活かされていくかを捉える必要がある。

4. 幼児の砂遊びに対する保育者の援助

実践者として幼児の砂遊びを参与観察した西田（2005）は、砂で遊ぶことが楽しいという思いを子どもにもってもらうためには、楽しい雰囲気や流れを保育者が作りだしていくことの重要性や、教師が砂場において幼児の居場所を意図的に作り出していくことで幼児が安心できることを指摘している。また、保育者がモデルになることで遊び方を示すことが重要であることについても述べている。さらに、幼児が砂と関わるなかで気づいたことを他の幼児へと広げていくことで、幼児同士の関わりができることや、幼児の言葉を繰り返すことで幼児が主体的に感覚を働かせていくことについて述べている。ただし、子どもの行為と保育者の援助についての考察について具体的な検討が行われていないため、保育者の援助の具体的な内容や意図が明確に示されているとは言えない。

柏（2007）は、砂遊びの状況に応じて、保育者が助言を行うことにより、幼児は自分で考え、なんらかの行動を起こすようになることを示している。このことは、保育者が子どもに安定感を感じさせるかかわりをするすることで、遊びの世界が広がっていくことを示している。しかし、柏の研究においても、西田の研究と同様に、具体的な援助の方法や意図が示されていない。

粕谷（2007）は、福西（2005）の研究を挙げ、保育者が幼児の遊びに大して表層のみで判断することが多く、比較的遊びが継続する砂にかかわる遊びにおいては、「遊んでいる」という判断を導きやすいと述べている。また、どのように砂とのかかわり、どのようなイメージをもち、そしてどのようなやり取りがなされて遊びが展開しているのかなど、具体的な遊びの経過については把握されていないことについて、保育者はひとつの遊びに対してじっくりとのかかわることができないため、偶発的な砂の減少に影響を受けやすい砂に関わる遊びでは幼児の活動を理解することが難しく、解釈に偏りが生じてしまうことが多いことや、幼児の会話が比較的少な

いこと、目的や意味を理解しやすい活動が生じやすいなどをその理由として挙げている。

粕谷が述べているように、子どもが「遊んでいる」と思いやすい場所であるからこそ、より子どもが砂遊びを深めていけるような環境構成や保育者の関わりが必要となる。その点で、さらに保育者が砂場を保育環境としてどのように捉え、生かしていくことができるかを考えることが今後の課題となる。

5. まとめと砂場研究の今後の展望

本研究では、国内で行われてきたこれまでの砂場での遊びに関する研究を整理してきた。ここでは、先行研究の整理によって明らかになった砂場での遊びに関する研究の課題を検討する。

第一に、笠間による砂場の歴史の整理からは、砂場が子どものための遊び環境として導入されたことが明らかになっている。しかし、殆どの砂場での遊びに関する研究において、砂遊びと砂場での遊びが同義に捉えられていた。砂遊びに関する研究の殆どが砂場での砂遊びを対象に行われていることから、砂遊びと砂場遊びが同義で捉えられていると考えられる。しかし、砂場は人工的に設置された一つの保育環境であることや、砂遊びは砂場以外でも行われることから、砂遊びと砂場遊びを〈砂遊び〉と一括りにするのではなく、砂場を保育環境として意図的に捉えた上での砂場での遊び、もしくは砂場以外での砂遊びの研究を行う必要があると考えられる。

第二に、砂場での遊びが子どもの発達を促すと多くの研究が述べているが、何がどのように促されるのかが不明瞭である。砂場での遊びによって社会性や想像力が促されると多くの研究で述べられているが、他の遊びとの違いがどこにあるのかが明らかにされていない。さらに、保育においては、多様な遊び・生活によって発達が促される。砂場遊びにおいてどの発達の側面が何によって促されているのかを、砂場における遊びの実態のみから明らかにすることには限界があるのではないだろうか。これらのことから、砂場での遊びが他の遊びと構造的にどのように異なるかといった特徴を明らかにすることが重要であると考えられる。また、砂場での遊びによって何が育つかという視点ではなく、子どもの発達によって砂場における砂や場との関わりが如何に変化するのかなど、子どもの砂や場との関わりの方的な発達の变化を検討していくことが重要なのではないだろうか。

第三に、先にも述べたように、砂場における保育者の援助についての研究は少なく、まだ多くの課題を残している。まず、保育者が砂場を保育環境の一つとしてどのように捉え、そこで

何を育てたいと考えているのかというねらいについての検討が必要である。さらに、砂場で遊ぶ子どもの姿をどのような視点で捉え、砂場という環境を生かして如何に援助していくのかといった実態についても検討することが必要となる。

引用文献

- 石井光恵, 1994, 「子どもが砂場で遊ぶとき—幼稚園での砂場遊びの観察から—」, 『武蔵野女子大学紀要』, 29(2), pp.219-227.
- 小川清実, 2000, 「出会いの種々相」, 遊びの探求, 保育ジャーナル.
- 大野友美子, 2003, 「子どもと遊び—子どもの育ちと砂場の役割」, 『立正社会福祉研究』, 4(2), pp.29-42.
- 笠間浩幸, 1998, 「子どもの遊び環境としての〈砂場〉: 砂遊びから見る子どもの発達と〈砂場〉の役割」, 『環境教育研究』, 1(1), pp.113-124.
- 笠間浩幸, 1999, 「砂場と子ども」
- 笠間浩幸, 2007, 「乳幼児の砂遊びに関する研究(1) 研究課題の整理と見直し」, 『総合文化研究所紀要』, 24, pp.162-175.
- 柏 まり, 田中亨胤, 2007, 「子どもの創造的遊びを支える教師の役割—砂場における教師と子どもの対話の分析を通して」, 『幼年児童教育研究』, (19), pp.11-21.
- 柏 まり, 2005, 「幼児期における遊びの創造過程の基本視座」, 『教育学研究紀要』, 51(1), pp.226-231.
- 粕谷亘正, 2007, 「砂にかかわる幼児の遊びの構造とその理解」, 『保育学研究』, 45(1), pp.34-41.
- 福西憲太郎, 2005, 「幼稚園における遊びの再考: 「砂遊び」の解釈学的アプローチ(III)」, 『京都文教短期大学研究紀要』, 44, pp.60-69.
- 朴 恩美, 中坪史典, 2008, 「幼児の砂遊びに関する日本の研究動向と今後の展望」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第三部, 教育人間科学関連領域, 57, pp.285-290.
- 半田孝司, 1999, 「幼稚園の砂遊び場に関する考察」, 『常葉学園短期大学紀要』, (29), pp.43-50.
- 細田, 1998 「幼児の「遊び」の生成過程—エコロジカルアプローチ—」東京大学教育学研究科総合教育学専攻教育学コース修士論文〈未公刊〉
- 松井愛奈, 2001, 「幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連」, 『教育心理学研究』, 49(3), pp.285-294.
- 無藤 隆, 1996, 「幼児同士の遊びの成立過程—砂場遊びの分析」, 『子ども社会研究』, (2), pp.3-17, 1996
- 文部省, 1995, 幼稚園設置基準
- 横山 勉, 2003, 「園庭における幼児の遊び空間に関する研究: 園庭の遊びの誘発要因分布(計画系)」, 『日本建築学会北陸支部研究報告集』, (46), pp.303-306.
- 横山 勉, 2004, 「園庭における幼児の遊び空間に関する研究: 幼児の活動と遊び環境構成要素(計画系)」, 『日本建築学会北陸支部研究報告集』, (47), pp.391-394.
- 横山 勉, 2005a, 「園庭における自然環境型遊び空間に関する研究」
- 横山 勉, 2005b, 福井工業大学研究紀要, 第二部 35, pp.37-45 「園庭における自然環境型遊び空間に関する研究(2): 遊びの場と誘発要因(計画系)」, 『日本建築学会北陸支部研究報告集』, (48), pp.397-400.